第３回　4/26　「『映画プロデューサーの仕事？』～映画の立ち上げから、完成まで～」

吉田 浩二（よしだ・ひろつぐ）先生　　**映画プロデューサー**

1961年京都市生まれ

関東学院大学文学部社会学科卒

1983年　㈱田中プロモーション　制作進行･仕上げ進行

1984年　㈱ユー･インターナショナル　東京支社アシスタント

1985年　㈱セディック　企画製作部　入社

《講義概要》

映画プロデューサーとして数々の作品に携わり、映画産業の最前線で活躍する吉田浩二氏が、映画プロデューサーの仕事や映画制作について講義を行った。

講義ではまず、映画プロデューサーの多岐に渡る一連の仕事内容について説明し、映画制作を一つの事業・ビジネスとして捉え、ビジネススキームの立案から最終的な資金回収までの責任を負う仕事であると言及。３つに分類されるプロデューサーの種類とその違いについても紹介した。続いて、リスクビジネスである映画産業の構図について、資金回収の流れやスポンサービジネスであるテレビとの違い、国内コンテンツ市場の現状等の面から分かりやすく説明。その中で、世界のマーケットへ進出することの重要性や、世界でヒットするコンテンツを生み出すことのできる人材が求められていることを伝えた。

また、映画制作の工程やこだわり、プロデューサーやスタッフの役割分担について、最新作「図書館戦争」を例に詳しく説明した。特に、プロデューサーの仕事で一番大切な「プリプロダクション（立ち上げ）の時期」の流れについて、時系列に沿って裏話を交えながら解説するとともに、情熱を持って諦めないことの大切さを示した。学生は、多くのスタッフによって時間を掛けて一つの映画が作り上げられていること、そして、映画制作にかける吉田氏やスタッフの熱い思いに感銘を受け、映画制作に携わる魅力を実感した。

《受講生の感想》

●自分は将来映像に関する特に映画・テレビの仕事に就きたいと思っている。映画ができるまでについてプリプロダクションから聞けてとても刺激になった。特に図書館での銃撃戦ができるまでの話が印象的であった。また、良質な作品を作るための絶対に妥協しない話が心に響いた。　　立命館大学・映像学部・2回生

●映画が公開されるまでの流れのお話を聞いてとても感銘を受けました。１本の映画を仕上げるのに吉田さんの努力はもちろん、数え切れない方々の協力があってやっと完成するということを強く感じました。今までは監督さんや出演者の方々にしか目を向けられていなかったのですが、今回映画プロデューサーという仕事を詳しく知ることができたおかげでますます映画に魅力を感じられるようになりました。

立命館大学・文学部・3回生

●映画のプロデューサーとして主にプリプロ関連の話を中心にしていただきました。立案から撮影の入りまで、どういった手順を踏んで準備をしていたのかを詳しく話してもらえたので、普段聞けない部分を知れた。現在学部で主にプロダクション・現場での活動を勉強しているので、スポンサー探しやキャスティング、プリセールスといった前段階での動きを学べてよかったです。リスクビジネスとスポンサービジネスの違いにも軸を置いて話してもらえて勉強になりました。

立命館大学・映像学部・2回生

●映像・映画プロデューサーの仕事を通してコンテンツビジネスの詳細や難点、流れを話していただいた。プロデューサーはエンタテインメントであるコンテンツをビジネスとして現実的に思考し、成功まで導く人であることが、体験談を通してよく理解できたことが嬉しい時間だった。監督とは勿論、会議やスケジュール、予算の面など隅々まで気を配り続けなければならない点において、プロデューサーは忙しくもやりがいのある仕事だと感じた。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●一つの作品を最高のものにするために、そのプランを一つ一つ立て実現していく。映画一つを作るためにとても多くの人が動き、いろいろな思いが込められていることを改めて知った。また、“これを作りたい”という強い思いで人がどんどん動かされていくというのに魅力を感じた。一方でいくら情熱をもって作っても、商業的に支援してくれなかったら公開できなかったりもするというのを聞いてすごくリスクの高いものだと思った。　　立命館大学・産業社会学部・3回生

●原作と映画をできる限り同じ世界観にするということがどれだけ難しいことなのかということが分かりました。良いものをつくるということは、多少無理かもしれないと思うようなことでも諦めずに行動することが大切だということも学ぶことができた。

立命館大学・産業社会学部・3回生